

子どもの非認知能力を育てる取り組み

綾瀬市の「親子の対話の時間」

保護者が上手に関われば、1歳、2歳の子どもに、やがて協調性や頑張る力が育ってくる。

教育ジャーナリスト 渡辺 研



イラスト/森永みく

親子体験参加型プログラム

な取り組みを、今号と次号で紹介する。幼稚園入園前、親と子どもとで過ごす大切な時間に、どう子どもに関わるかを学べる取り組みだ。

「親子の絆を深めるコミュニケーション親子の対話の時間」という。

神奈川県綾瀬市が、平成30年度の新事業として立ち上げたものだ。親子体験参加型プログラムで、30年6月～31年2月に5回開催される予定。対象は、市内在住の1、2歳の子どもとその保護者。子どもをひざに乗せて、

〇×学^①の講義を聴くのではない。講師の話の聴き、実際にその場でやってみる。

単発の講演会や親子教室ではなく、年間プログラムが組まれたことが大きな特徴だ。

取り組みを正確にお伝えするため、今号では市の「記者発表資料」を紹介する。といっても堅苦しいものではなく、とても重要な子育て支援だとわかっていただけだと思う。

◆取り組みの概要 楽しい遊びを通して、親が子どもと心の繋がりを深める方法を学び、非認知能力を身につける「親子の絆を深めるコミュニケーション」の手法を学び、「親子の対話の時間」を充実させる。

◆目的 乳幼児期は生涯にわたる人間形成の基礎を培う極めて重要な時期であり、「生き

親として育つために

学校で学び、国家資格を取得し、4月の第1週に学級担任として教壇に立ったからといって、それでたまたまに教師になっただけではない。名実ともに教師となり、教師と呼ばれることに自信をもてるようになるには、それ相応の学びや経験、努力が必要だ。幼稚園教諭や保育士に同じだろう。OJT（オン・ザ・ジョブ・トレーニング、実務による職業教育）を続けながら、少しずつ

一人前の保育者に育っていく。

それは「親」も同様だと思う。子どもを産んだ途端、生まれた途端、その瞬間から自動的に母親や父親になれるわけではないと思っただけ。わが家の娘は1歳の誕生日を待たずに保育園児となった。私もなんやかやと子育てに携わりながら、経験し、考え、父親になっていった。単なる1事例だが、その経験から「親になる」のではなく、「親として育つ」ものだと思っている。

親として育つための手助けをしてくれそう

る力」を育むため、他の人とうまく関わる力、目標に向かってがんばる力、感情をコントロールする力などの非認知能力を身につけます。なんだか、第1特集（P10）の「たく生き」に通じる取り組みだ。乳幼児期に保護者がこんな子育てをしていてくれれば、子どもたちは困難にも自力で立ち向かっていける青年や大人に育っていく。

心のつながりの深め方を学ぶ

内容を見てさらに、保護者の関わり方によって、1歳児、2歳児にもこんな心や力を、意識して育てることができるとかと思った。

◆内容 子どもにとって安心な環境づくりと情緒的安定性を育てること、共感性や思いやり、異なりを認めて他者を尊重する心、感動する心や前向きな心を育てるため、わらべうたや手遊び、子どもの好きな遊びを親子で行い、楽しい遊びを通して、親子の心の繋がりを深めていきます。

- ①読み聞かせなどにより信頼できる大人の声を聴くことで、子どもにとって安心な環境づくりと情緒的安定性を育てる
- ②わらべうた・手遊びなどを通じて、まねたり、周りの人に合わせたりすることで、言葉や発音、文化を学ぶ
- ③周りをまねる遊びや想像する遊びを通じて、共感性や思いやりを育てる

④子どもの好きな遊びで、個々のスタイルに合わせた遊びを行うことで、異なりを認め他者を尊重する心を育てる

⑤美しさや喜びを発見する遊びを行うことで、感動する心や前向きな心を育てる

◆セールスポイント 気持ち安定している子は集中力も高く、人間関係を上手に保ちながら能力や個性を伸ばしていくことができます。この「心の安定」は乳幼児期に親や信頼できる大人との間で形成される心の繋がりが大きな役割を果たしているといわれています。本講座では、楽しい遊びを通して、親が子どもと心の繋がりを深める方法を学びます。

参加する保護者は、歌や遊びを覚えるのではなく、心のつながりを深める方法を学ぶ。こんな子どもに育ってもらうための取り組みではあるけれど、同時に、子どもにとってこういう親であってほしいという取り組みのようにも思えた。

すてきな子育てと親育て

5回を通して講師を務められるのは、桜美林大学講師の梶谷久美子さん。

「心」や「気持ちのやりとり」を大切にしたい、コミュニケーション能力を向上させるためのプログラムを開発してこられた。幼児教育が専門ではなくコミュニケーション教育の専門家。「異文化コミュニケーション・コンサル

タント」「EQトレーナー」として、大学だけでなく、企業等でもコミュニケーション能力向上のための活動を行っている。

だから、綾瀬市のこの取り組みは「子育て講座」ではなく、「親子の絆を深めるコミュニケーション」の手法を学び、「親子の対話の時間」を充実させる。

8月に開かれた第2回目では、子どもの成長を促す声のかけ方がテーマだった。

幼児は耳だけでなく背中からも骨の振動で聴いているので、密着することも大切だという話があったそうだ。

10月に第3回目が開かれたのだが、実はその日、会場におじゃまして、活動をつぶさに見学させていただいた。感動的な場面に立ち合うこともできた。また、梶谷さんや、この事業を提案した、ある方^②にもお話をうかがえたので、次号ではページを多めに、それを伝える。

参加は26組。母親同士がいろいろな（ふだんではまずあり得ないような）方法でコミュニケーションを取り合い（そういうアクティビティがあった）、最後に、わが子にそれを実践。また、この時間を通じて新たな子育て仲間もできたようだ。

このように「子育て」と「親育て」ができるのかと、とてもすてきな子育て支援策に思えた。次号をお楽しみに。